

新刊
紹介

村上俊遺稿編集委員会編

『おのが日をかぞふることを教へたまへ——キリストの証人』

村上俊——』

(比叡書房・発行一九八七年十二月
A5版・五六七頁 三、八〇〇円)

一九三四年三月に同志社大学神学科を卒業してユニオン神学校に学び、S・T・M.を取得して神学科の専任講師になった村上俊は、第二次大戦に応召して犠牲になった人だ。

犠牲になったといっても、戦死したのではない。敗戦後ソ連軍の捕虜として、樺太で強制労働に従事中の一九四七(昭和二二)年二月二日、倒木に打たれて事故死したのである。

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

ある。三六歳であった。哀れであり、無念であり、そして腹立たしくて仕方がない。このほど、その村上俊の遺稿集が、藤代泰三、今井万里、渡辺泰造、遠藤彰、荒生司の五氏によって編まれた。

彼の遺稿集は一九五〇年にも、おなじ比叡書房から『ルッテルとバルト研究』という書名で刊行されている。これは彼の學術論文を、恩師の大塚節治先生(村上は大塚先生の後継者となることが約束されていた)らが編集したもので、もし健在で同志社へ復帰していたら、これを土台に、同志社神学の伝統に新たな開花をもたらせることになったろう。

今回の遺稿集は、学究であり敬虔かつ熱烈なキリスト者であった人間村上俊の全貌を、くまなく描き出そうとするものである。数々の遺影が巻頭を飾り、キリスト教関係の雑誌に掲載したエッセイ、説教(彼は丸太町教会S・S・校長、上鳥羽教会主管者であった・講義・講演の草稿やノート、三佐保夫人へのおびただしい書信、恩師・学友・戦友たちによる追悼文などが収録されている。おそらく、これだけの遺稿

集は滅多にあるまい。

どのページからも、学究としての真摯な姿勢と、キリストへの熱い信仰心が如実にうかがえて、思わず杵を正さずにいられない。

健康には比較的恵まれていたようだが、それにしても酷寒の樺太で、餓死せぬように与えられる食糧だけで強制労働に耐えていたのは、学問への非凡な熱情と信仰があったからだろう。こんな所に一年もいたら学問に遅れると、睡眠時間を極度にへらして読書にふける一方、栄養失調の友人に食糧を分け与えたり、代って労働のノルマをあげたという。友人に代っての労働中の事故死であった。

遺品の中に、きちんと洗濯した衣類と黒パン四日分、書き込みをした三木清著『哲学入門』、ボロボロになった聖書があったという。誠に惜しい人を地上から奪われてしまった。

「神は何故に選り選って、斯くも惜まるる君を召し給つたでありましょうか」(大塚節治「告別の辞」『遺稿集』所収)。まことにそうだ。遺稿は現行かなづかいに改めら

れているので、学生諸君にも容易に読めるはずである。

河野仁昭（本部社史資料室長）

岩山太次郎編

『金メッキ時代とアメリカ文学』

（山口書店・発行一九八七年九月）
（A5版・一七八頁 二、〇〇〇円）

好著。えてしてこういう編書になると、言わばその宿命なのか、どうしても一貫性に欠け、重複が目立ち、使われる字句すらも、まちまちになりがちだ。ところが、この岩山太次郎編『金メッキ時代とアメリカ文学』は全く違つ。そういった寄せ集めの感がない。それどころか、むしろ編書ならではの妙味、強味がよく出ている。見事という他ない。

この成功はたしかに一九八五年度京都アメリカ研究夏期セミナーに参加された方々の間で交わされた討議の成果かもしれない。しかし、なんと言つても、それはこのセミナーのディレクターを勤められ、この書の編者である岩山太次郎氏の卓抜した方に依るものと思われる。

「金メッキ時代とアメリカ文学」、聞いた

だけでも目まいのしそうな巨大なテーマ。

これを論究し、読者を納得させるだけの一本にまとめるとなると、全く至難の業である。それが、まずイェール大学教授アラ・ン・トラクテンバーグ氏の都市・文学論がこの支柱に据え、それをかっちり支えるのに選りすぐりの九つの支柱を置くという万全の構築で成功している。「金メッキ時代とアメリカ文学」——これをトウエン流に言い換えると“fact and fiction”となる。従来出た夥しい数の文学研究書、文学史で十分に成されなかった、このfactとfictionとの結び付けを、この書の巻頭にあるトラクテンバーグ氏の「金メッキ時代の都市と文学」が果たす。驚いたことに、この分裂と激変の目まぐるしかった金メッキ時代のイメージが「探ねても見つからない」都市ニューヨークのイメージと重なるのだ。この発想に触発され、これまで「解説不能」であった文学の部分がどれだけ「解説可能」になるか、計り知れまい。そして、この論文は今まで不可解だった金メッキ時代の暗い部分の解明にも当然役立つ。そもそも、このアメリカの南北戦争の

戦後は名付けようにもどう名付けていいか迷いに迷い、切端つまつて付けた名が「金メッキ時代」だったという。つまり、トウエンとウォーナーとの合作小説の題名から困り果てて借りたというのが真相のようだ。このように命名にすらてこずった金メッキ時代にこの書が、文学の面からの光を導入するきっかけを作った功績は大きい。

先に「九つの支柱」で表わした九論文もさすがに読み応えがある。それぞれに「臨場感」溢れる珠玉の作物を取り上げ、この時代を生き、造った人間の失意、意識、ノスタルジア、未来感を紹介する。それも、ずぶの素人の小説、詩人の書いた「最も気まぐれな」散文集、反対に、小説家の書いた「大胆な——時には大胆過ぎる」詩集、「汽車に乗ったカウボーイ」など滅法風変わりで、滅法面白い——これがこの書の特徴である。一読をお勧めする。

那須頼雅（大学商学部教授）

トマス・ハーディ著

滝山季乃・橋 智子訳

『狂おしき群をはなれて』

(千城・発行一九八七年七月
B6版・六二二頁 一、八〇〇円)

十九世紀イギリス文学を代表する偉大な作家の一人であるトマス・ハーディ (Thomas Hardy 1840~1938) には数十編に及ぶ長編、短編小説を始めとして数百編にのぼる詩作、詩劇などがある。しかし、それら数多くのハーディ作品の中、邦訳されているものは他の作家に比べて決して多いとは言えない。殊に長編小説などは訳されてはいても、すでに絶版で入手不可能であるとか、余りにも古い文体で難解である等の理由から、ハーディの全作品が現代文で分り易く訳出されることが長い間ハーディ愛好者の間で待ち望まれていた。この様な折、今回、千城より出版された滝山季乃、橋智子訳「狂おしき群をはなれて」(Ea from the Madding Crowd) が邦訳された意義は非常に大きく、注目に値することである。

訳者の滝山季乃先生は昭和七年本学英文

学科を御卒業、長年にわたって同志社女子大学で教鞭を執られ、退官後も名誉教授として活躍中である。先生は研究面でもトマス・ハーディ一筋に研究され、昭和三十四年に「ハーディ小説の鑑賞」、五十二年に前書の増補改訂版として「ハーディの小説研究」を出版されている。その後これらのすぐれたハーディ研究の業績によって、先生は同志社女子大学より文学博士の学位を授与されている。

共訳者の橋智子氏は滝山先生の教えを受けられた後、着実なハーディ研究によって数多くのすぐれた研究成果を挙げられ、恩師の後継者としての役割を十二分に果たされている。

この様な翻訳者による今回の共訳であるだけに、いわゆる共訳に起り勝な訳出上の不統一も殆んど見られない、師弟の息が実によく合った素晴らしい翻訳になっている。しかも、今回の訳では従来の翻訳に見られた様な難解な古文調のものではなく、非常に分り易い、実によく練られた文体による適切な訳出になっている。このことはハーディ愛好者だけではなく、今後ハーディ

イ研究を志す者にとっても非常に貴重な福音である。

この作品はハーディが三十四歳の一八七四年に出版されたハーディの初期作品の一作であるが、彼の晩年の傑作「テス」、「ジュード」等に比べて、邦訳されたものは非常に少なく、最近では昭和四十四年出版の高畠文夫氏の訳が存在している程度である。滝山先生は現在迄に「森に住む人たち」を五十六年に、六十年に「青い眼」を単独で或いは共訳で訳出されているが、今後も更に新たな作品の訳出に挑戦される事を期待して止まない。

那須雅吾 (大学経済学部教授)

岡 満男著

『大阪のジャーナリズム』

(大阪書籍・発行一九八七年六月
B6版・二七八頁 一、五〇〇円)

この書物は、大阪に生まれ育ち全国紙へと発展した『朝日新聞』『毎日新聞』を軸に百年をこえる新聞のあゆみを語っている。情報のあふれている時代とはいえ、新聞はいまも私たちにとって身近なものです。その歴史やかかわった人物については

断片的にしか知らなかった私には、非常に教えられるところがありました。

全体を通して新聞が「政治権力のふるまいにたいする監視役として機能する」ためには、「精神的な距離をたもつことが絶対不可欠」であるとする著者が、大阪という町をどのようにとらえ、ジャーナリズムのありようをどう考えているか、が示されています。

勧善懲悪の趣旨をもって俗人婦女子を教化し導くという目的をかかげて小新聞として出発した『朝日』が、それ以前の政党機関紙と異なり一般市民に目を向けたものであったことや、新聞の存廃に政治権力がいかにかわりをもっていたかを知らされます。また、新聞が「不偏不党」をうたうとき、支柱をもたぬ不偏不党がいかなるものであるかを、鋭く指摘しているのは、現在にも通じる問題提起といえることができるでしょう。

群雄割拠の東京新聞界と異なり、大阪における『朝日』『毎日』のきそいあい、実業界の新聞経営とあいまって、設備の充実、人材の養成、さらには飛行機や海外旅行に

のりだした『朝日』にたいして、スポーツと映画に力を入れる『毎日』の紹介、また日清・日露の戦況速報に火花をちらすありさまが描かれています。紙面に家庭に関する話題が登場するのは女性記者の登用にもふれています。

やがて全国紙へと発展していった両新聞が単にきそいあうだけでなく、憲政擁護や内閣批判のたたかいに協調して立ちあがったことなど、その当時の社会状況をめぐるジャーナリズムの動きがよくわかります。

民衆の生活不安のなかで、政治が民意から断絶していることを克服しようとする「普選」と「治安維持法」をめぐる両紙の論調と、これに対する権力の動きなどとともに、認識を欠く消極性がどのような結果をもたらずか、いまなお課題として受けとめるべき点が示されています。敗戦前後の記述にふれる余地がなくなりましたが、戦争協力にたいする両紙の自己批判を含め、興味ある資料が紹介されています。

「東京中心の視角だけで全国をとらえる錯覚に一石を投じたい」とする著者の、ジャーナリズムに対する暖かくも厳しい目を

感じさせる書物であり、ジャーナリズム界に進みたいと願う若い人びとに是非読んでほしい一冊でもあります。

河崎洋子（大学宗教部主事）

河野仁昭著

『京都の文人―近代』

（京都新聞社・発行一九八八年二月）
B6版・三三二頁 一、五〇〇円

同志社専門学校の講師で、詩人であり、劇作家であった高安月郊の文章に「明治の京都には新聞記者しか文章家はいなかったし、雑誌といえは美術雑誌しかなかった」というのがあるそうである。明治維新は京都の文学活動にも大きな傷跡を残した。それまで隆盛を誇った出版活動が東京に移ってしまったことも決して無縁ではなかったのである。

この京都の文学も明治二十五年、「日出新聞」文芸記者として招かれた巖谷連（小波）を中心とした復興の基盤が築かれる。

出版活動は依然低迷を続けていたけれど、文芸サロン「瞳々会」の発足をはじめ三高、京都大、同志社などの文人学者に、やがて彼らに感化をうけた学生たちが新しい

担い手として登場、次代に受け継がれることになる。

こうした京都の近代文学の流れを概観しながら、人と足跡を解説したのが本書である。著者の同志社社史資料室長、河野仁昭氏は、詩誌「ノッポとチビ」「すてっぷ」の編集同人として活動している詩人でもある。収録される本文は、同タイトルで昭和六十一年四月から一年八カ月間にわたって京都新聞文化面に掲載された連載企画で、これに京都の近代文学史を加筆して纏めた。取り上げられているのは、大田垣蓮月から渡忠秋、与謝野礼蔵、上田敏、土田杏村、竹内勝太郎から現在も嬰鑠として活躍する天野忠ら四十七人である。

近代の京都の文学をめぐっては、これまで残念ながら作家とその歩みをまとめた文献はなかった。そればかりか京都と文学が語られるとき、決まって近代文学の多くの舞台に京都が選ばれているにもかかわらず、文学が育たないといわれてきたところがないではない。「文学不毛論」をいう人さえあった。

「あとがき」に著者が「『京都は文学不毛

の地だ』といわれてきたことへのチャレンジである。その一語に尽きる」と書いているように、本書のねらいは実にこうした暖味な風評への反発と同時にその検証にある。

著者には京都の現代詩人を中心にとめた作家論「現代詩への愛」の好著があり、豊富な資料を駆使してその人と思に迫まる評論には定評がある。取り上げられている四十七人においても例外ではない。

とりわけ「京都の近代文学」では、文学の潮流を鳥瞰しながら、時代を追って人とその文学周辺に及び、格好の京都文学通史といえる。京都における同志社文学の位置づけには、多くの示唆を含んでいる。

杉田博明（京都新聞社編集局・文化部）

大谷 實著

『刑事政策講義』

（弘文堂・発行一九八七年九月
A5版・四〇七頁 三、二〇〇円）

まさに待望の書である。本書は、現在のわが国で実施されている刑事政策を、刑事司法全般の視野から、最新の動向を含めてできるかぎり客観的かつ系統的に叙述し、

刑事法と関連づけながら、できるかぎり体系的に叙述する（はしがき）という方針に従い、第一編刑事政策の基礎、第二編犯罪の対策、第三編各種犯罪と犯罪者、という体系構築を試み、刑事政策学の方法を、科学主義・法治主義・人道主義・国際主義に求めている。

まず第一に、本書の基本的特徴は、「理論に裏づけられたプラグマティズム (theory-coupled pragmatism)」(スタンフォード大学教授バッカーがこの言葉でアメリカ模範刑法典の基本的特徴をとらえている)にあるといえるのではなからうか。大谷教授自身、「刑事政策の現状に対する理解なくして、生きた刑事政策を語ることはできない」(はしがき)といわれているように、つねに実務との調和を視野に入れつつ、理論展開がなされている。本書は、実務をリードするという機能を果たすことは疑いない。第二に、本書は、学者としての責任感に満ちた、「責任の書」である。本書は、客観的な分析・統合の叙述にとどまらず、刑事政策の諸問題について、必ず著者自身の説得力ある見解が提示されている。たとえ

ば、「国民の安全感に直接かわる暴力事犯は全体として減少傾向にあるところから、犯罪数が戦後最高に達したとはいえ、治安状態は悪化していない」といってよい。したがって、今後の動向には警戒を要するが、近年の犯罪の増加に対処するために現在のわが国の刑事政策を大幅に転換する必要はなく、今日の刑事司法を着実に前進させることを当面の指針とすべきであろう。」(三五頁)とされている。第三に、本書は、「気配りの書」である。叙述が簡潔・明快であるのみならず、重要語句はゴチック体にされており、深い教育的配慮がうかがわれる。著者の司法試験審査委員(刑事政策の委員を経て現在刑法の委員)としての経験からであろうが、学習者には決定的な価値をもっている。

以上、本書は、一般学生・司法試験受験者・研究者・実務家にとって、貴重な「信頼の書」であるといつてよいであろう。

墨谷 葵(京都産業大学法学部教授)

坂本武人編著

『新しい生活経営』

(ミネルヴァ書房・発行一九八七年七月)
(A5版・二一七頁 一、八〇〇円)

この書物は、永年にわたって生活設計、生活構造といった問題領域の研究を進め、家計簿診断を具体的に行ってきた編者が、より一歩進んで「新しい家庭経営」というタイトルのもとに「自立と選択の家庭経営」を明示しようとしたものである。この「自立と選択」の家庭経営とは編者によれば、「換言すると、家庭や生活を権力や金力から解放し、愛をよりどころとした新たな真に豊かな人間生活を模索するもの」(はじめに)であり、そこから家庭経営の担い手は二つの視点に立って、生活を理解することが望まれる。「一つは生活を長期的展望においてみる視点であり、もう一つは生活を社会的広がりにおいてみる視点である。」(はじめに)

そのような視点から、ライフサイクルやライフステージでの生活者の主体性と、さらに「家計(消費者)の企業(生産者)からの自立と、家庭生活に必要とされるもの

」主体的な選択の可能性を提示すること」(はじめに)が基本的理念とされている。

このような基本的理念のもとに、すべての人間が生活することで関与するところの家庭経営という問題を、単に家庭内の家事技術的な領域で把握のではなく、家事労働、家族関係、役割分担、地域社会と家庭といった従来から多くとりあげられてきた問題との関係において明確にしつゝ、「人間の幸福追求、自己実現」(二〇〇頁)を核として、経済学と家政学の一体化(二〇一頁)の中に位置づけるべく努力されており、そのところが非常に興味深く、評価される。各章ごとのコラムは単なる用語説明を越えて問題提起がなされており、読者に対して親切である。

しかし、これからの家庭経営問題へのアプローチとしては是非とも国際経済的視点を入れて論ずることが必要であろうし、そのことがこれからの研究方向であろうと思われる。

新しい家庭経営を、「自立と選択」の家庭経営として、社会的基盤との関係で弾力

的に把握されているところから、この書物の構成は「生活のしくみの変化と新しい家庭経営」「結婚するまで——準備期の家庭経営——」「結婚したら——新婚期の家庭経営——」「子どもが生まれると——育児期の家庭経営——」「子どもの成長につれて——子どもの成長期における家庭経営——」「住生活の安定のために——住まいの選択と家庭経営——」「多様化する生活様式——「雑費の時代」の家庭経営——」「生活主体の変化に対応する——主婦の社会参加時代の家庭経営——」「ライフスタイルの変化と家計の収入・支出——貯蓄とクレジットの家庭経営——」「生活上の不安にそなえる——高齢化社会の家庭経営——」「社会の変化に対応する——消費者問題の普遍化と家庭経営——」「国民経済のなかの家庭経営」となっている。

佐々木佳代（女子大学教授）

光澤滋郎著

『マーケティング管理発展史』

（同文館・発行一九八七年九月
A5版・三〇二頁 三、五〇〇円）

たんなるマーケティング管理論史あるい

はマーケティング管理文献論史ではなく、「マーケティング管理における発展法則の解明」という理論課題は、多くのマーケティング研究にとって魅力的なテーマである。とくに、日本では、米国のケースを中心に数多くの研究者がこの課題に挑んできた。なかでも光澤氏は、長年にわたってこの問題に正面から取り組んできたこの分野の指導的な研究者の一人である。

本書の特徴は、次の点に整理できる。第一に、対象ならびに問題への接近に対して慎重な考慮が払われていることである。なかでも、マーケティング管理のありようがそれを取り巻く状況とは無関係ではありえないこと、つまり歴史的存在として認識することが強調される。そしてある歴史時点で有効なマーケティング管理体系も、歴史的に区分された別の時点では有効ではなくなるという、その基本的なメカニズムを分析の中心に据える。氏は、とくに自身「マーケティング管理の自己運動論」と呼ぶところのアプローチに依拠しようとするのである。

第二に、一八〇〇年代後半の「伝統的マ

ーケティング管理」からはじまり、戦後の「マネジリアル・マーケティング」とどまらず、「環境志向的マーケティング」そしてこれからの発展が予感される「市場管理」の考え方を提唱するというこれまでにない長期にわたる管理の変遷を視野に収めているということである。

第三に、これまでこの研究分野ではあまり注目されなかった「マーケティング監査」の重要性を指摘し、それがマーケティング管理に組み込まれているかどうかをマーケティング管理の一つの基本的な分類軸として採用していることである。

氏が提案する考え方、あるいは著書の中で出てくる著者独自の命題について一つ一つ論じるだけの余裕はないが、研究者仲間にはいろいろと論議を呼びそうである。その意味で、マーケティング論になじみがない者にとっては難しい議論が多いかもしれないが、評者を含めて多くのわが国のマーケティング研究者あるいはこれからマーケティングを学ぼうとする者にとって、貢献度の高い貴重な基礎文献となるだろう。

ただ少し個人的な感想を言えば、①マク

口経済状況の変化を個別企業のマーケティング管理の変遷に係関係づけるときに、法体系、生産・製品・商業(取引)技術の状態、あるいは問題となる管理様式を生みだした産業のもつ独特な条件などをもう少し考慮することが必要なのではないか、また②データソースとして管理論の文献に依拠するよりも、データの入手可能性という問題があるかもしれないが各時代区分に代表的な企業あるいは産業の実際のマーケティング管理に関連した一次データを調べるという方法もあるのではないかという印象も消すことができない。それは、しかし本書の価値を減じるものではなく、むしろ本書によって触発されたわれわれの今後の課題を明確にしたという意味で評価すべきことなのである。

石井淳蔵(大学商学部教授)

植田三郎著

『数学を創った人たち——自然の探究の中で』

(国士社・発行一九八七年八月
B6版・一八八頁 一、八〇〇円)

この本のもともなったのは、植田さんが

ここ何年かの間に、一、二の大学で一般教養の数学の講義でとりあげたトピックスであるという。とりあげられた人物は、ターレス、ピュタゴラスからアルキメデスをへて、近代のガリレオ、デカルト、ニュートン、ライプニッツにいたるまで十四人に及んでいます。哲学、自然学から始まって、運動学、天文学そして微積分学の創造まで、話題は非常に豊富で、しかも原典の引用から、基本的な研究書の紹介にまでわたっており、非常にレベルの高い本であると思います。それが植田さんの軽妙な語り口で文章化されているので、わりあい気安く読むことができます。基本的な文献によりながら、いわゆるアカデミックな数学史などの叙述ぶりとは違って、「以下ワケガワカランことが書いてある」とか(B.59)、「訳していてもなんとなくよく分からなくなってきました」とか(B.86)、という植田さんの感想が書かれているので、読んでいてわからないところがあってもいいと、気楽になれます。おそらく、この本をもとにして植田さんの話が聞けたら、とてもおもしろいだろうなと思います。

個々のわからないところは沢山ありますが、全体を通してみると、宇宙観とか、運動の見方とかが、哲学的なもののから、次第に科学的なもののへと変わっていく。もっともそれが一本調子でそうなるのではなく、科学的なものも、最初は古い時代の考えや外被をまといながら次第に自らをあらわしていく。その中で観測や計算の努力が示されており、ニュートンやライプニッツの微積分の創造も例外でないことがよくわかります。

ですから、この本の標題はむしろ『自然の秘密を探究した人たち』とでもしたほうがよかったのではないかという気もします。

最後に希望を二、三。古典や研究書からの引用と植田さんのコメントとの境目をもう少しはっきりしてほしかったこと、引用文献に「邦訳あり」としてあるだけのものがありますが、邦訳書をはっきり示してほしかったこと、それからミスプリントがかなりあり、ことに記号が今日のものと違っているのを読みづらかったことなど、これらの長は再版の折りに可能ところは直し

てほしいと思います。

この本をテキストにして読書会などをして、この内容を自らのものとしてこなし、授業の中に生かすことができれば素晴らしいと思います。

宮本敏雄（元大学教授）

立脇徳松著

『アンデスに凍結真空乾燥技術の源流を求めて』

（日本書籍・発行一九八七年十月
B6版・二〇九頁 二、五〇〇円）

著者は二十数年来、「凍結真空乾燥技術」の研究に従事してきたが、著者によるとこの原理は単純でつぎのように要約できる。食品などを凍結させて真空中に置くと氷は昇華して食品は乾燥する。この操作は低温で行われるため食品の組織上の変化もなく、空気や湿度から遮断されていれば数十年後でも水に浸すと元の状態に復元する。設備品とエネルギー代が高くつく難点はあるが、理想的な乾燥法なのである。

歴史に関心のある著者は自分の専門の立場から日本古来の高冷地で作られる凍豆腐、寒天、さらに標高四千メートルのアン

デス高原でインディオと呼ばれるケチュア族が作ったインカ帝国、その独自の文化に興味を持った。彼等の食生活の原点は乾燥ジャガイモであり乾し肉である。インカ神殿にある歴代インカのミイラは何を物語るか。インディオがインカ帝国を築いた秘密の一つは、彼等がアンデス高原を天然の凍結乾燥工場としたためではないかと著者は考えた。

かつて筆者は日本の生んだ小麦の世界的権威、木原均博士が小麦の原点ともいうべきタルホコムギの原種をチベット高原に求めて旅行し、それを発見したときの感動的な記事を読んだことがある。著者はインカ文明の原点であるアンデス高原の凍結乾燥技術を是非見たいものと長年思っていたが、一九八六年遂にその機会が与えられた。このことが本書が生れた原動力となったようである。本書の第五章「アンデス地方のインディオ主食は凍結乾燥ジャガイモ」と第七章の「インディオを訪ねて」はこの本の圧巻であろう。行間に著者の喜びが伝わって来る思いがする。

この本は技術解説、旅行記、随筆の三部

門から成り立っているが、専門の数式もほとんど用いられていないので、専門外の人にもそれなりに充分理解できる。その他外国旅行での体験や日常生活上の雑感なども織りまぜながら凍結真空乾燥を巧みに紹介している。第九章の「家庭菜園のすすめ」の中のナメタジやモグラ退治法は思わず笑ってしまふ。

温故知新という言葉がある。アンデス高原にインカ文明の原点を求めることは現代のバイオテクノロジーやエレクトロニクス等の先端技術にも通ずる道である。この書が著者の研究の一里塚となり更なる研究の発展となるよう願うものである。

末光力作（工学工学部教授）